

英語コーパス学会 第 22 回大会資料

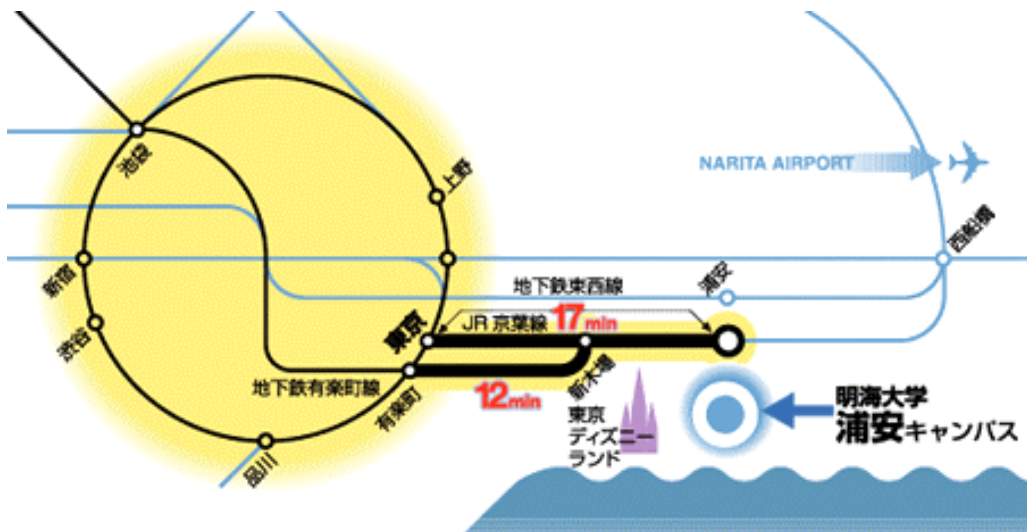
日時: 2003 年 10 月 25 日(土)午後 1 時より(正午受付開始)

会場: 明海大学浦安キャンパス

(<http://www.meikai.ac.jp>)

〒279-8550 千葉県浦安市明海 8

TEL: 047-355-5120

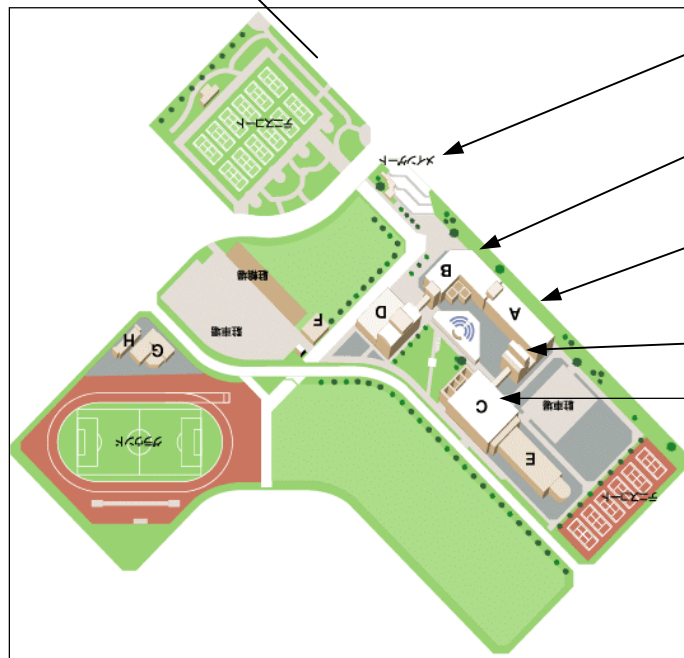


新幹線東京駅から京葉線のプラットフォームまで約 15 分かかりますのでご注意ください。

新浦安駅の改札口を抜けて右側に出てください。左下方向にバスの発着場が見えます。その向こうのシンボルロードを南東にお進みください。明海大学まで徒歩で12分です。



新浦安駅方面



メインゲート

開会式・研究発表・シンポジウム

B(ノースウイング)2階 2205 教室

ワークショップ

A(サウスウイング)6階 2610 教室

*エレベータをご利用ください

*A,Bは廊下でつながっています

懇親会場

レストランニューマリズ

学生食堂

第 22 回大会プログラム

受付開始 12:00

開 会 13:00 (講義棟 ノースウイング2階 2205)

1. 会長挨拶 今井 光規 (摂南大学)
2. 開催校代表挨拶 原口 庄輔 (明海大学英米語学科長)
3. 第 2 回学会賞授与式 今井 光規 (摂南大学)
4. 事務局報告 赤野 一郎 (京都外国語大学)

研究発表 13:30 ~ 15:15 (講義棟 ノースウイング2階 2205)

司会 吉村 由佳 (慶応大学非常勤講師)

1. Have/Did/Do you ever~ 構文の分析—Larry King Live Corpus を対象にして
井上 亜依 (関西学院大学大学院生)
西澤 緑 (関西学院大学大学院生)
司会 朝尾幸次郎 (立命館大学)
2. 学習者コーパスを利用した中間言語の可変性研究—日本人英語学習者の話し言葉の分析
阿部 真理子 (上智大学非常勤講師)
司会 塚本 聡 (日本大学)
3. ESP のためのジャンルコーパス作成の試み—XML によるタグ付与と検索プログラム
野口 ジュディー (武庫川女子大学)
井村 誠 (大阪工業大学)

休憩 15:15 ~ 15:30

シンポジウム 15:30 ~ 17:40 (講義棟 ノースウイング2階 2205)

《英語構文研究の実践—コーパスの貢献》 司会 深谷 輝彦 (椋山女学園大学)

1. 基本形と変種の同定にあずかる大規模コーパス—同族目的語構文を例に
講師 大室 剛志 (名古屋大学)
2. 周辺の構文を記述するためのコーパス利用—現代英語における SOV 構文を例に
講師 滝沢 直宏 (名古屋大学)
3. コーパスと理論的分析における仮説、制約の提案・検証—結果述語の範疇選択の問題を通じて
講師 都築 雅子 (中京大学)
4. コーパスからデータが得やすい構文, 得にくい構文—*a beautiful two weeks* と *book after book* を例に
講師 大名 力 (名古屋大学)

閉会の辞 投野 由紀夫 (明海大学)

懇親会 18:00 ~ 19:40 (レストラン ニューマリズ 会費:4,000 円)

ワークショップ 10:30—12:00 (講義棟 サウスウイング6階 2610)

《コーパス言語学のための Perl 入門》 講師 赤瀬川 史朗 (赤瀬川翻訳事務所)

発 表 要 旨

【研究発表】

Have/Did/Do you ever~ 構文の分析 —Larry King Live Corpus を対象にして—

井上亜依（関西学院大学大学院生）

西澤 緑（関西学院大学大学院生）

アメリカ口語英語では、(1) Have you ever thought of retiring? (2) Did you ever think of retiring? (3) Do you ever think of retiring? のような Have/Did/Do you ever ~ 構文が使われている。Did you ever ~? Have you ever ~? は「過去の経験」を問い(八木 1990, 柏野 1999)、Do you ever ~?は、「習慣の頻度を表わす」(Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1999; Huddleston & Pullum 2002)という説明がなされている。しかしながら、3 構文の差異について、これまで量的な調査が行われておらず、語法研究、英和辞書においても詳しい記述がないようである。本研究は、アメリカ口語英語コーパス Larry King Live Corpus (LKL Corpus)¹ 約 700 万語を使用し、3 構文が共起する動詞に焦点を当て、動詞の出現頻度から 3 構文の差異を考察する。コーパス調査の結果、think, feel は Did you ever ~? Do you ever ~?との共起が多く、Have you ever ~?では少ないというように、動詞の使われ方に顕著な差が観察されたことを論じる。

¹ アメリカ CNN テレビのインタビュー番組 Larry King Live 及び Larry King Weekend の 1996 年以降の transcripts を集めた関西学院大学八木克正教授のコーパス。

学習者コーパスを利用した中間言語の可変性研究 —日本人英語学習者の話し言葉の分析—

阿部真理子(上智大学非常勤講師)

本発表は学習者コーパスを用いて、話し言葉における言語発達過程を探り、学習上困難な項目と学習者の習熟度を測定する上で指標と成り得る項目を特定する試みである。研究方法としてはまず、約 15 分で行われる Standard Speaking Test (SST) から、1 枚の絵を描写するタスクの発話データを利用して、話し言葉コーパスを作成した。SST とは 5 つの異なるタスクで形成されており、受験者のスピーキング能力が 9 段階で評価されるテストであって、すべての発話データのレベルが判定されている。次に SST と同様に 1 枚の絵を描写するテストを紙面上で行い、話し言葉の全体的エラーの傾向と比較するために、書き言葉コーパスを作成した。そして、これらの学習者コーパスの文法的な誤用法に、エラータグを付与して、レベルごとにエラーの比率と種類の数を出した。その結果より、(1) 学習者のレベルに関わりなく出現するエラー、(2) 学習者のレベルが上がるにつれて増加するエラー、(3) 学習者のレベルが上がるにつれて減少するエラー、(4) 言語形式に注意を払っている場合と払っていない場合により増減のあるエラーについてそれぞれ分析した。このように異なる習熟度レベルにある学習者のエラーを比較することは、言語習得のプロセスについての理解を深めることにもなり、日々の指導とフィードバックなどの他にも、レベルに適合した教材やテスト作りに役立つことができるのではないかと考えられる。

ESPのためのジャンルコーパス作成の試み —XMLによるタグ付与と検索プログラム—

野口ジュディー (武庫川女子大学)
井村 誠 (大阪工業大学)

本発表では、ESP(専門分野別英語)教育への応用に向けた、ジャンルコーパス作成の試みを紹介する。専門分野におけるテキストには、語彙・文法レベルの特徴に加えて、文章構造や文体に分野固有の特徴が認められる。これらのジャンル特性を、学習者に効率的に習得させるために、Noguchi(1997)は、PAIL と OCHA によるアプローチを提唱している。すなわち、ジャンルテキストの Purpose(目的)・Audience(読み手)・Information(情報内容)・Language(言語的特徴)を、Observe(観察)・Classify(分類)・Hypothesize(仮説)・Apply(応用)というタスクを通じて理解させようとするものである。このアプローチにコーパスを活用することを目的として、発表者らは、レトリック構造タグを付与したジャンルコーパスのサンプルと、その検索プログラムを作成した。データは 2001 年度 Fortune ランキング 上位 8 社の年次報告における CEO's Message である。これらのテキストから、Swales(1990)の枠組に基づいてレトリック構造を抽出し、XML によるタグを付与した。また、タグを付与したデータは、ブラウザ上ではレトリック構造が一目でわかるように、表形式で表示されるようにスタイルシート(XSL)を作成した。さらに、XML によってタグ付けされた文書データベースから、キーワードないしキープレーズを含む箇所を、レトリック構造の情報と共に表示させるシステムを開発した。この検索プログラムによって、ある語句や表現が、ジャンルテキストのレトリック構造のどの部分で用いられているのかを検証することができる。今後このシステムは、e-learning 用教材として発展させていくことが期待できる。

【シンポジウム】

英語構文研究の実践 —コーパスの貢献—

司会 深谷輝彦(椋山女学園大学)

本シンポジウムの目的は、英語構文研究においてコーパスを用いる意義を改めて問うことにある。本学会においてもコーパスを利用した英語の語法・文法に関する研究発表がしばしば行われる。そこでは、コーパスを検索した結果の提示およびその解釈がなされる。しかし、コーパスを利用した研究結果とコーパスを利用しない研究結果を比較することはまずない。そこで、このシンポジウムでは、コーパスを利用した英語研究の中間段階で必ず遭遇するコーパス検索がなぜ必要か、という問いに構文研究を通して答えたいと思う。

具体的には大室講師が同族目的語構文、滝沢講師が SOV 構文、都築講師が結果構文、大名講師が名詞句をとりあげ、それぞれの構文の性格を解明する上で、コーパスを利用して初めて何が判明したかを中心に論じる。本シンポジウムの論点は、次の3点である。

- (1) 構文研究にみる英語直観とコーパスデータ
- (2) コーパスから調べる構文の基本形と変種
- (3) 構文の語彙的制約

研究発表では当たり前の作業として行われるコーパス検索で、研究者がどのような思考法をとっているのかを披露することで英語コーパス研究の発展に寄与できるものと思う。

1. 基本形と変種の同定にあずかる大規模コーパス

—同族目的語構文を例に—

講師 大室剛志(名古屋大学)

文法は対等の資格からなる規則の単なる寄せ集めではなく、中核的な規則から周辺的な規則へと連続的に多重的に構成されている。また、1つの構文も対等の資格からなるメンバーの単なる寄せめではなく、構文を構成するメンバーには、その構文の基本形もあれば、変種もある。このような連続的多重的な文法観に立つならば、文法の中核部だけに研究範囲を絞ることはできず、周辺部に属する構文の変種メンバーの分析でさえもおろそかにすることはできない。

本発表では、英文法の周辺部に属すると思われる同族目的語構文を取り上げ、その基本形と変種を同定する際に、大規模コーパスが有用であることを論じる。具体的には、非対格動詞が生起するメンバー、受動形のメンバー、動詞の後にコンマを伴うメンバー、動詞より特定のな名詞が出るメンバー、修飾語句を伴わないメンバー等を変種メンバーとして同定する際に、British National Corpus、Bank of English、WebCorp が提供してくれるこれらのメンバーの出現頻度が一つの手がかりとなることを論ずる。

2. 周辺的な構文を記述するためのコーパス利用

—現代英語における SOV 構文を例に—

講師 滝沢直宏(名古屋大学)

現代英語の基本的語順が SVO であることは周知の事実である。しかし、ごく稀ながら、SOV の語順の文が生じることがある。

(1) Formal training does not necessarily a good teacher make.

(2) Twin peaks don't a mountain range make.

(3) One exception does not a statistic break.

この構文(仮に「SOV 構文」と呼ぶ)は、母語話者の判断に大きな揺れが見られ、「全く不可」から「完全に自然」まで多様である。また、「良く知られた詩の一節や諺に依拠した表現」であるとする意見がある一方、そのような依拠表現であると考えする必要はないとする意見もある。

判断や意見にこのような揺れはあるものの、Bank of English や British National Corpus などの大規模コーパスを検索すると、かなりの出現が見られるという事実がある以上、現代英語の記述において、この構文を見過ごすことはできない。

本発表では、「SOV 構文」に関する母語話者の直観による判断とコーパスからのデータを詳細に検討し、この構文の性格、典型と周辺、構文に課される語彙的制約などを吟味する。その上で、ごく稀にしか生じることのない構文を記述する際には、大規模コーパスに依拠する以外に妥当な研究方法がないことを論ずる。

3. コーパスと理論的分析における仮説、制約の提案・検証

—結果述語の範疇選択の問題を通じて—

講師 都築雅子(中京大学)

語彙意味論、構文文法、認知文法など様々な理論的枠組みで盛んに研究されている結果構文を取りあげ、コーパスを利用する意義について考察する。

(1) With songs she lulled him asleep.

(2) Its music would lull me to sleep.

具体的には、上記の下線部に示される結果述語の範疇選択(形容詞句か前置詞句か)の問題を通じて、コーパスにおける生起総数(タイプ頻度とトークン頻度)などを調査することにより、より正確な事実観察が可能になり、信頼性の高い制約の提案と検証が可能になることを示したい。たとえ対象となる言語の母語話者でなくても、説得力のある証拠を提示することができると思われるからである。特に、コーパスデータにおけるタイプ頻度とトークン頻度、およびその相違は、生産性の高さ(当該の表現形式のどれがデフォルトか)の問題と関わるという意味で、興味深い。この問題は、理論的には、Kiparsky(1973, 1982)の非該当性条件(elsewhere condition)など、条件の種類の問題と関わる。言語習得の観点からは、言語習得データと規則の過剰一般化に関わる Bybee(1985)の主張を裏付けるものである。この点にも触れたい。

4. コーパスからデータが得やすい構文, 得にくい構文

—*a beautiful two weeks* と *book after book* を例に—

講師 大名力(名古屋大学)

コーパスの規模の拡大, ウェブページの増加・検索の容易化によって, 研究に必要なデータが得られやすくなっているが, どんな構文でも, 詳細な記述・仮説の検証に十分なデータが得られるわけではなく, 現実には, コーパスから必要なデータが得やすい場合と, 得にくい場合が存在する。本発表では, 前者の例として, (1) *a beautiful two weeks* のように(複数)名詞に不定冠詞・形容詞・数詞が先行する構文を, 後者の例として, (2) *book after book, day after day* のように前置詞の前後に同じ名詞が来る構文を取り上げる。

一見すると, (2)の方が(1)よりも一般的で, コーパスから得られる情報も多いように思えるが, 実際には(1)の方が仮説検証に必要なデータをコーパスから得やすい。(2)の構文については(現在, 一般に利用可能な環境では)十分なデータが得にくいいため, 統語的特性について詳細に記述しようとするならば, かなりの部分, インフォーマントからの情報に頼らざるを得ない。本発表では, これら2つのケースを対比することで, コーパス検索の必要性を示すと同時に, (現時点における)コーパス利用の限界についても触れることとしたい。

【ワークショップ】

コーパス言語学のための Perl 入門

講師 赤瀬川史朗(赤瀬川翻訳事務所)

CUI(キャラクタ・ユーザ・インターフェイス)プログラムになじみの薄い Windows ユーザの研究者を対象に, コマンドプロンプトの操作と Perl スクリプトの実行方法を実習します。Perl スクリプトの書き方ではなく使い方に重点を置き, CUI でのテキスト処理を体験していただくのが本ワークショップの狙いです。

前半のコマンドプロンプトでは, 基本的なコマンドの使い方のほか, リダイレクトやパイプなど, テキスト処理に欠かせない機能を取り上げます。後半の Perl 入門では, スクリプトの使い方に焦点を絞り, 講師が用意した頻度解析, n-gram, コンコーダンス, コロケーションなどの実用的なスクリプトを実行し, Perl によるコーパス分析の手法を紹介します。

《大会参加者へのご案内》

- 車でのご来場はできません。
- 受付は正午から行います。
- ワークショップの受付は10時から行います。
- 受付事務簡略化のため、会費未納の方は必ず大会前に同封の郵便振替用紙で納入してください。
- 昼食は学生食堂（マリNZ）がご利用になれます。大学の隣にイトーヨーカドーが、道路をはさんだ向かいにファミリーマート、ジョナサンがあります。また新浦安駅構内およびその近辺（ダイエーなど）にも飲食店があります。

2003年9月 発行
編集・発行 英語コーパス学会
代表者 今井 光規
事務局 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6
京都外国語大学 赤野研究室内
TEL 075-322-6103 FAX 075-322-6246
i_akano@kufs.ac.jp
<http://muse.doshisha.ac.jp/jaecs/>
